

第5章 豊成叶林遺跡の調査

第1節 遺跡の立地と層序

1 遺跡の立地(第2・3図、巻頭図版2)

豊成叶林遺跡は、大山北麓から派生する丘陵上に位置している。調査地の標高は約57～65mである。日本海へ向けて緩やかに傾斜するこの丘陵帯には河川の浸食による大小の谷が存在し、これらの丘陵裾には様々な微地形が伴う。調査地は丘陵から北西方向に張り出す微地形を横断するため、東側は平坦部であるが、西側は谷に向かう斜面部となっている。

調査前の現況は山林であった。調査地北西側には、カナクソ溜池が、調査地西側にはそれにつながる水路が存在する。本遺跡の西側には倉谷荒田遺跡、東側には豊成上神原遺跡が隣接する。

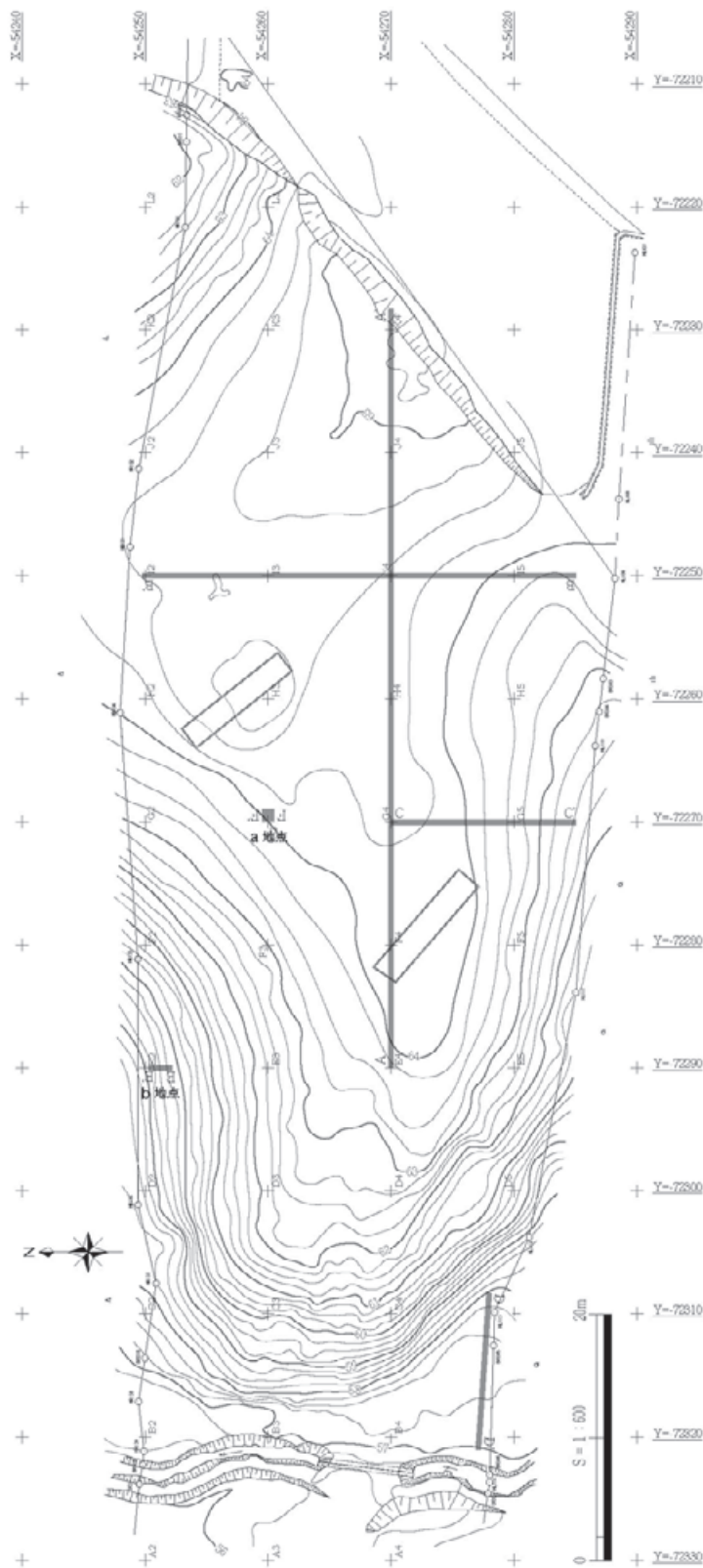
2 調査地内の土層堆積(第71～75図、P.L.36)

調査地内の土層堆積については、G3杭付近に設置したトレンチ(a地点)、グリッド格子に沿って設置したベルト(A-A'、B-B'、C-C')、調査区南壁(D-D')、E2杭付近に設置したトレンチ(b地点)で確認した。丘陵平坦部と丘陵裾部の土層堆積には連続性が認められない。したがって、丘陵平坦部の土層をI～XIII、丘陵裾部の土層を1～13とする、

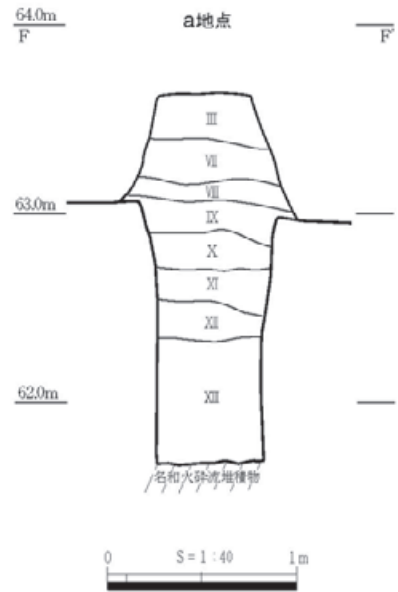
丘陵平坦部において広域に堆積している土層はa地点のトレンチで確認できる。以下その概要を述べる。

- I層 褐色土(10YR4/4)。弥生時代から現代までの遺物を僅かに含む。
- II層 におい黄褐色土(10YR4/3)。二次的に堆積した弥生時代の遺物を含む。
- III層 暗褐色土(7.5YR3/4)。縄文時代から弥生時代後期までの遺物を含む。
- IV層 極暗褐色土(7.5YR2/3)。平坦面南側のみに堆積する無遺物層である。
- V層 暗褐色土(10YR3/3)。平坦面南側のみに堆積する無遺物層である。
- VI層 黒褐色土(10YR3/2)。平坦面南側のみに堆積する無遺物層である。
- VII層 明褐色土(7.5YR5/6)。大山上部火山灰を主な母材としたローム層である。いわゆるソフトロームに相当する。
- VIII層 黄褐色土(10YR5/6)。一次堆積の始良丹沢火山灰(AT)層である。
- IX層 におい黄褐色土(10YR7/4)。大山中部火山灰に由来する層であり、地表面として露出していたため、水の作用で脱色したものと考えられる。いわゆる白色ロームである。上部に旧石器を包含する。
- X層 橙色土(7.5YR6/6)。大山中部火山灰に由来する層である。
- XI層 明褐色土(7.5YR5/6)。大山中部火山灰に由来する層であるが、直下のXII層と漸移的な連続をしているため黄褐色寄りの色調となっていると考えられる。
- XII層 橙色土(7.5YR6/6)。名和火砕流の風化層あるいは火砕流堆積物と想定される。
- XIII層 名和火砕流である。

A-A'からは、平坦部の普遍的な堆積状況が確認できる。またB-B'では、黒褐色系の土層の堆積が確認できる。これらは、丘陵平坦部に堆積していたものが、緩やかな斜面に流れて二次堆積したも

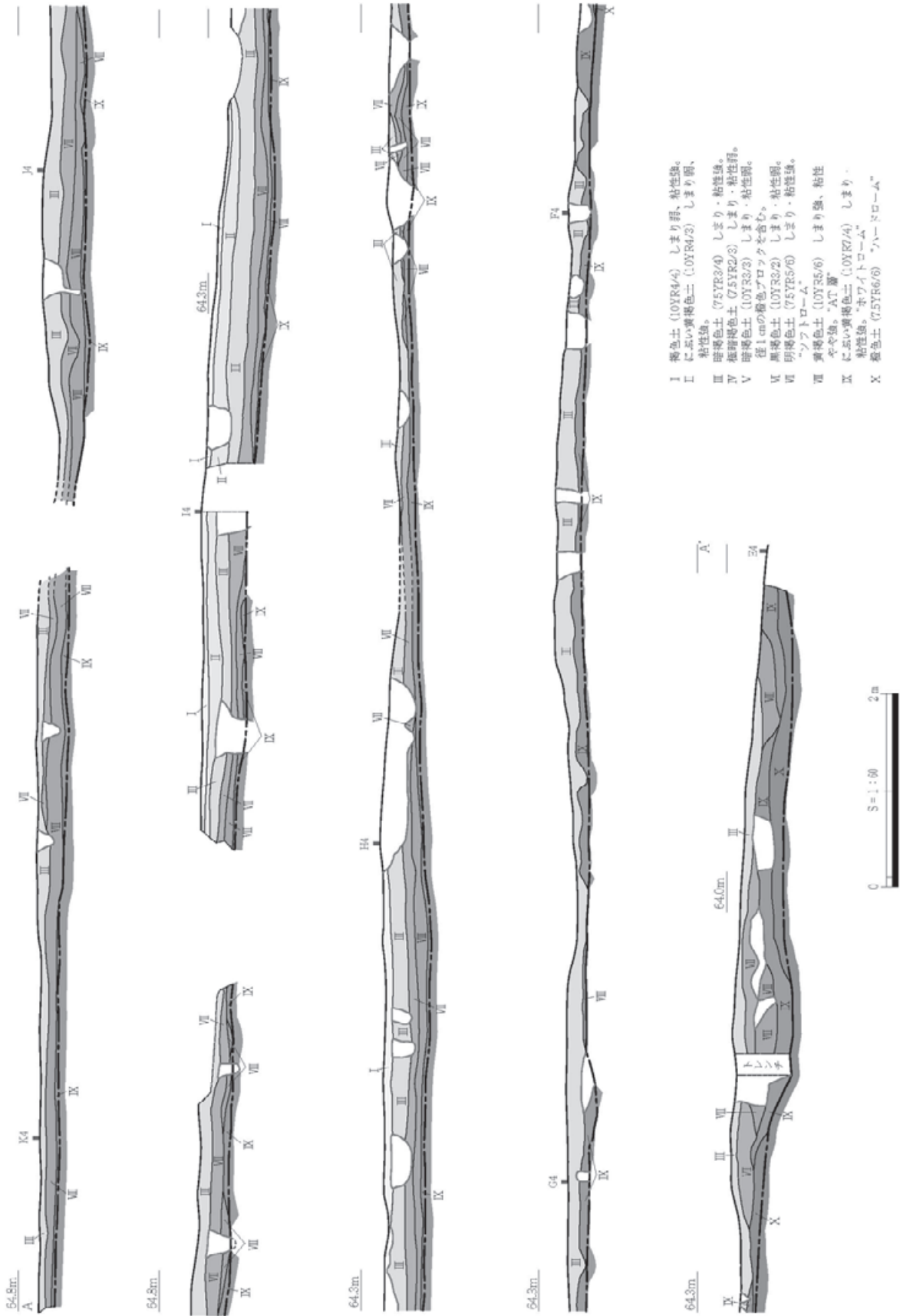


第71図 調査前地形測量図

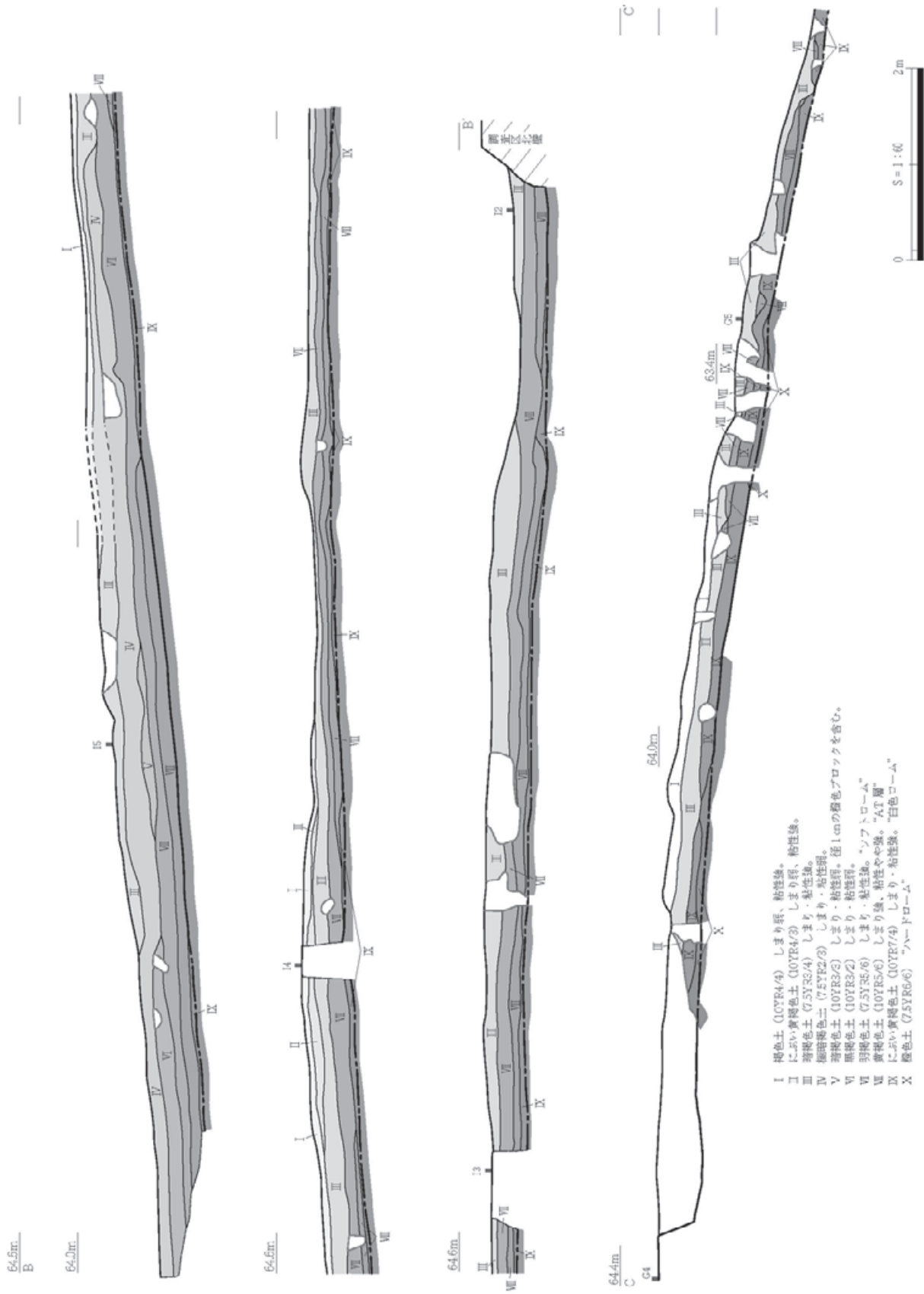


- III 暗褐色土 (7.5YR3/4) しまり・粘性強。“ソフトローム”
- VI 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり・粘性強。
- VII 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり・粘性強。
- VIII 黄褐色土 (10YR6/6) しまり強、粘性やや強。“AT層”
- IX におい黄褐色土 (10YR7/4) しまり・粘性強。“白色ローム”
- X 橙色土 (7.5YR6/6) しまり・粘性強。“ハードローム”
- XI 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり・粘性強。粘質土。白色砂粒・マンガンを含む。含水率高い。
- XII 橙色土 (7.5YR6/6) しまり・粘性弱。テフラ・白色砂粒を非常に多く含む。黄褐色パミス・炭母・角閃石を含む。
- XIII 明褐色土 (7.5YR5/6) 一褐色土 (10YR4/6) しまり・粘性強。径1cmの青灰色アイサイトを含む。マンガンを非常に多く含む。含水率高い。

第72図 a地点土層断面図



第73図 A-A' 土層断面図



第74図 B-B'・C-C'土層断面図

のであり、本来平坦部全体に黒ボクが堆積していたことを示している。C-C'では、これら黒ボク由来の層やⅦ層の堆積が認められないため、これらの堆積がⅢ層堆積以前に、標高の低い箇所に流れたものと考えられる。丘陵裾部の堆積には、いずれも名和火砕流に由来する砂礫が含まれており、丘陵上から流れた堆積であることが推定できる。D-D'では、遺構廃絶後に2層が広い範囲で堆積したことが確認できる。また、6層より下位の層からは遺物が出土していない。b地点のトレンチでは、斜面部北側に無遺物層が厚く堆積していることが確認できる。

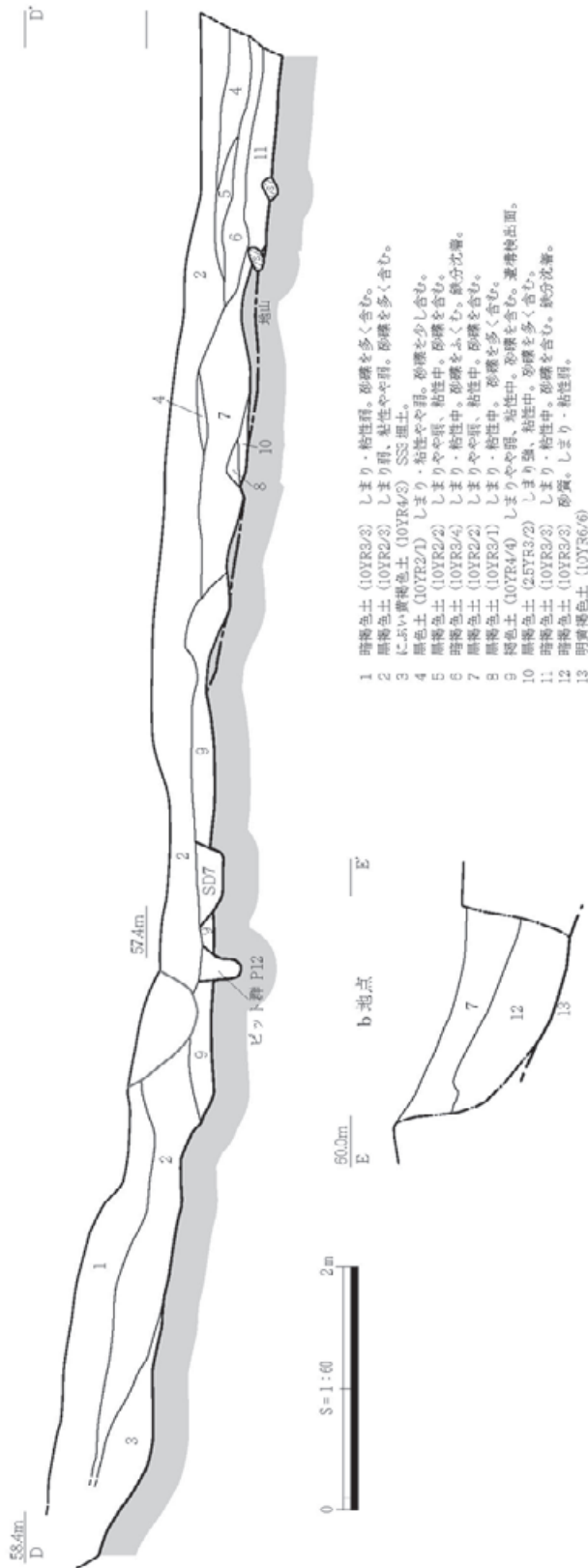
第2節 調査の概要
Ⅲ層掘削中に、旧石器時代のものと考えられる玉髓製剥片等が出土し、旧石器時代の石器が出土することが想定された。そのため、丘陵平坦部はⅨ層上部までの掘削及び検出を行った。また、斜面部はローム層あるいは名和火砕流までの掘削を行ったが、Eライン以東は、掘削による危険を回避するため、トレンチによる堆積の確認にとどめた。斜面裾部は、遺構検出のため、無遺物層の掘削も行った。

第2節 調査の概要

調査の結果、旧石器時代の石器ブロック(以下、ブロックと呼称)2基、縄文時代と推定される落とし穴3基、弥生時代の竪穴住居跡1棟、中世のテラス状遺構3基、溝1条、土坑1基、集石遺構1基、ピット群、時期不明の溝7条、土坑3基、集石遺構2基を検出した。

Ⅸ層上面で検出したブロック、Ⅲ層上面で検出した土坑が2基あるほかは、検出層位の差が遺構の時期の差と結びつくものはない。

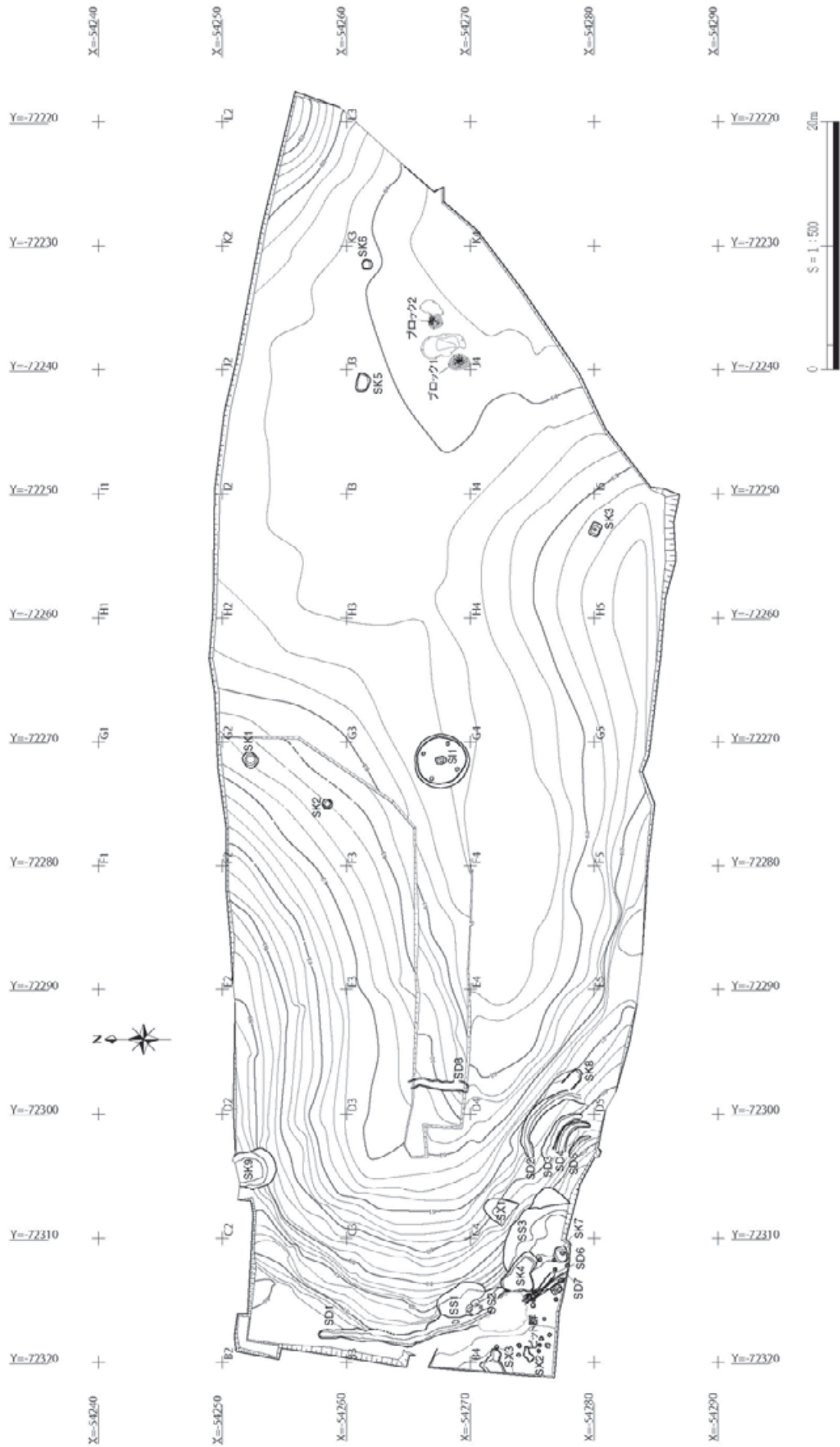
Ⅸ層上面で検出したブロック、Ⅲ層上面で検出した土坑が2基あるほかは、検出層位の差が遺構の時期の差と結びつくものはない。



第75図 D-D'・b地点土層断面図



写真5 ブロック1検出作業風景



第76図 調査後地形測量図

調査地内から出土した遺物としては、玉髓製石器、黒曜石製石器、縄文土器、弥生土器、土師質土器、五輪塔などがある。

第3節 旧石器時代の調査

1 概要

豊成叶林遺跡では、始良丹沢火山灰(AT)の一次堆積層直下の、白色ローム層上面付近から263点の石器が出土した。その中には11点のナイフ形石器が含まれる。このほかに、後世の包含層等から旧石器が3点と旧石器の可能性のある石器が8点出土している。

石器のうち254点は、2つのブロックを形成していた。このうちのブロック2には、炭化物集中と、炉跡の可能性のある粘土塊集中が伴う。ブロックはどちらも径2m以下と小さく、主に割られた母岩も1つずつと小規模であるが、かえって遺跡を形成した最小の単位を明らかにできる。剥片の多くが接合関係をもち、人間行動と石器製作技術を復元できる良好な資料である。

表38 旧石器の概要

	石器		剥片					二次加工片		破片	石核	計 (g)
	ナイフ形 石器	二次加工 剥片	石刃	小石刃	剥片	折片	付随剥片	プランティ ングチップ	端部折片			
ブロック1 (g)				12 (2.65)	39 (20.52)	1 (1.53)	10 (1.49)	23 (0.19)	8 (1.06)	51 (1.41)		144 (28.85)
ブロック2 (g)	8 (12.86)		4 (6.62)		19 (9.54)		9 (16.69)	28 (0.51)	2 (0.06)	39 (1.01)	1 (70.16)	110 (117.45)
ブロック外 (g)	3 (5.25)	1 (3.06)	1 (4.17)		4 (8.77)							9 21.25g
後世包含層 (g)		2 (17.47)	1 (1.14)		7 (41.42)						1 15.25g	11 75.28g
計 (g)	11 (18.11)	3 (20.53)	6 (11.93)	12 (2.65)	69 (80.25)	1 (1.53)	19 (18.18)	51 (0.70)	10 (1.12)	90 (2.42)	2 (85.41)	274 242.83g

2 調査の方法

本遺跡においては、AT層(VIII層)以下の堆積状況がよく、特に旧石器を包含する白色ローム層(IX層)上面はAT層によってバックされていることが、旧石器調査の初期に確認できた。また、大山町門前第2遺跡など、他遺跡の調査例との比較において、AT層下面からの遺物の深度が問題になることが予想された。そこで、石器が出土し始めた段階で、ひとまず周辺のATを除去し、50cmのメッシュを組んで、白色ローム層上面の標高を計測した後に、ブロックの検出を行った。

ブロックの調査においては、良好な遺存状況を踏まえて、生活面の検出と、微細な剥離物の出土位置を記録することに注意を払った。生活面の検出のためには、石器を高く残したまま周囲を掘り下げること避け、遺物の記録と取上げを複数回繰り返しながら、全面を均一に下げた。炉跡の可能性のある粘土塊集中や炭化物は、これにより確認できた。微細剥離物については、「剥離の座」の同定をはじめとするブロックの構造の解明や、人間行動の復元のために重要と考えた。検出は移植ゴテ等を用い、手ごたえや音を手がかりに、1点ずつ動かさずに遺物であるかの確認を行った。その結果、0.1g以下の破片多数を原位置で検出し、非常に高い精度の調査となった。

出土した遺物については、行動復元の情報を得るために、ポイントのみを記録するのではなく、縮尺2分の1の平面実測図を作製して、方向や傾きなども記録した。また、石器と白色ロームの色調が

似ていたため写真では出土状況の記録が難しかったが、この平面実測図により出土状況を総合的に生々しく表現することが可能になった。

3 ブロック1 (第77・78図、PL.37・38)

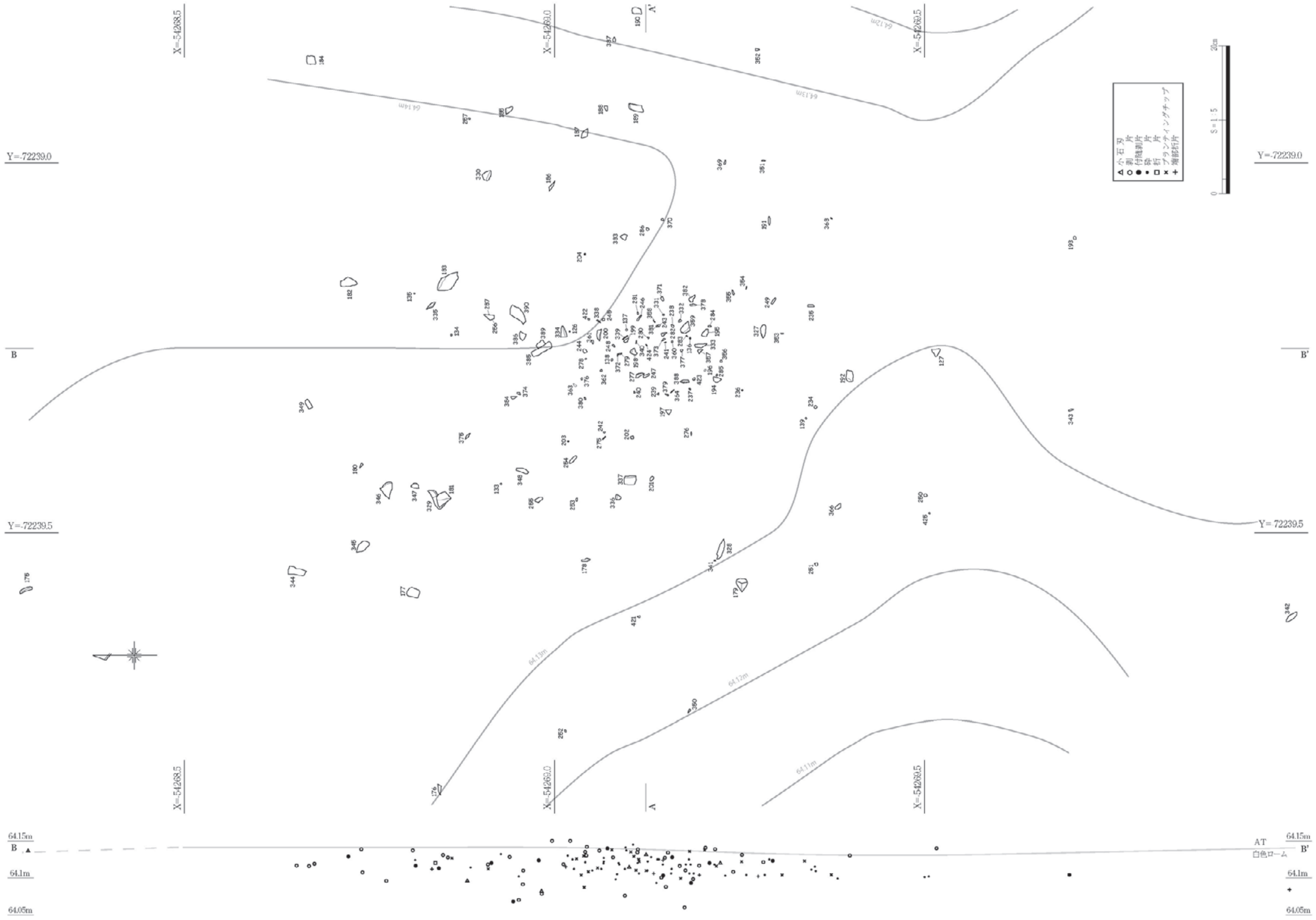
(1) 石器の分布

調査地の東端近く、南東から北西に向けて緩やかに下る尾根上に位置し、I 4グリッドの南西隅に当たる。標高は約64.1mを測り、ブロックの範囲では地形はほぼ平坦である。北東には、約2.5mを隔ててブロック2がある。2つのブロックに挟まれる形で、長径3.6m、短径1.9m、深さ1.4mの大きな風倒木痕が検出されているが、その埋土からは剥片が2点しか出土しなかったため、幸運なことに、ブロックはどちらもほとんど影響を受けていないと考えられる。

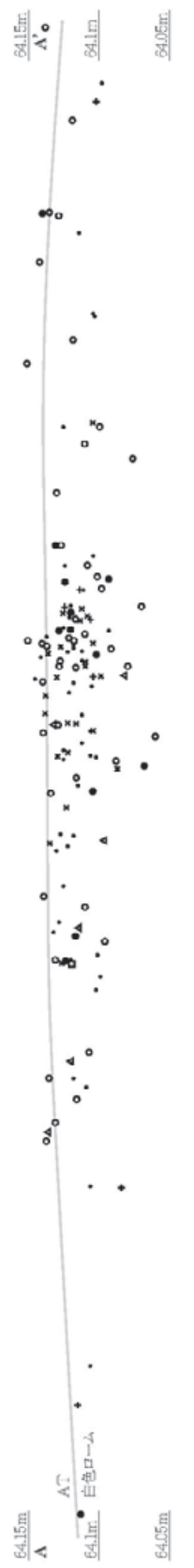
旧石器は144点を数え、すべて玉髓を原材とする。層位的には、10cm程度の厚さをもつAT層の直下から、約5cmまでの深さの、白色ローム層上面付近で出土した。特にAT下2~3cm付近によくまとまっているので、埋没後の移動はほとんどしていないと判断される。出土層準は、地表面からは約80cmの深さを測る(第77図)。ブロック2とは異なり、炭化物や変色した粘土は検出されなかった。



第77図 ブロック1と4ライン土層



- △ 小石ノ片
- 付随割片
- 埴
- 埴ノ片
- × プランテイングチップ
- +



第78図 ブロック1

ブロックの平面形は、南北170cm×東西105cmの楕円形を呈する(第78図)。95%の遺物は、88cm×85cmの範囲に分布し、さらにその半数は、25cm×20cmのごく狭い範囲に集中している。この部分は、碎片やブランディングチップなどの小さな剥離物で主に構成され、石器製作作業が行われた「剥離の座」にあたると思われる。一方、ブロックの北部には、このブロックとしては比較的大きめの剥離物が、散漫に分布している。割ったばかりの剥片の中から見えそうなものを取り置いた一次選別の場と推定できる。

(2) 石器組成

ブロック1から出土した遺物の組成は、表39のとおりである。

ブロック1の石器の特徴としては、小ささと有用性の乏しさがあげられる。144点のうち、重量1.0g以下のものが75%を占め、さらにその8割以上は0.1gに満たない。石器型式に関しては、完成した石器が1点もないことが大きな特徴である。また、剥片はいずれも不定形であり、石刃は1点も含まれない。小石刃に分類したものが9本分12点あるが、連続剥離が行われた証拠は確認できず、数量も少ないので、目的的に取られたものであるかについては疑問が残る。石器が全くないにもかかわらず、少なくとも31点の二次加工片が存在することは注目に値する。ブランディングチップや、ナイフ形石器の基部や先端の端部折片が含まれることから、ナイフ形石器の製作が行われ、そのすべてが遺跡外に持ち出されたことが証明できる。

石材は、3母岩に識別できるが、ほぼ2母岩に限られる。144点のうち131点は母岩1に、11点は母岩2に属し、母岩1が圧倒的である。母岩3は碎片2点だけである。144点の石器のうち、何らかの接合関係が認められるのは37点で、全体の25.7%である。一見すると低い接合率であるが、小さな剥離物が大半であるため、0.1g以上のもの50点に限れば、接合率は58.0%になる。

ブロック1とブロック2の間には、接合関係はない。母岩1に類似した付随剥片が1点だけブロック2で出土しているが、明らかな母岩の共有関係も認められない。

表39 ブロック1組成

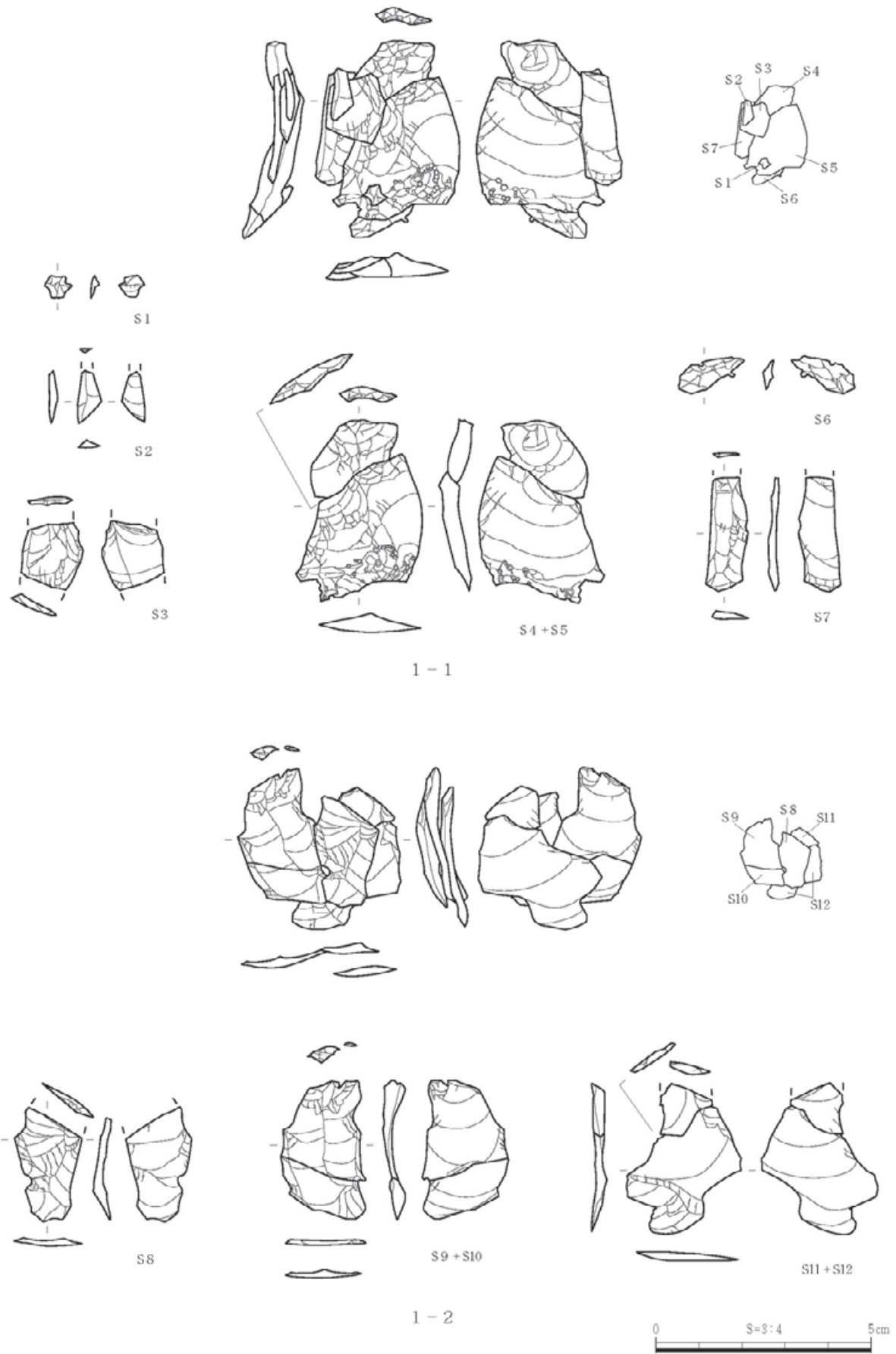
	石器		剥片					二次加工片		碎片	石核	計 (g)
	ナイフ形 石器	二次加工 剥片	石刃	小石刃	剥片	折片	付随剥片	bチップ	端部折片			
母岩1 (g)				12 (2.65)	32 (19.09)		10 (1.49)	23 (0.19)	8 (1.06)	46 (1.24)		131 (25.72)
母岩2 (g)					7 (1.43)	1 (1.53)				3 (0.05)		11 (3.01)
母岩3 (g)										2 (0.12)		2 (0.12)
計 (g)	0	0	0	12 (2.65)	39 (20.52)	1 (1.53)	10 (1.49)	23 (0.19)	8 (1.06)	51 (1.41)	0	144 (28.85)

(3) 出土遺物

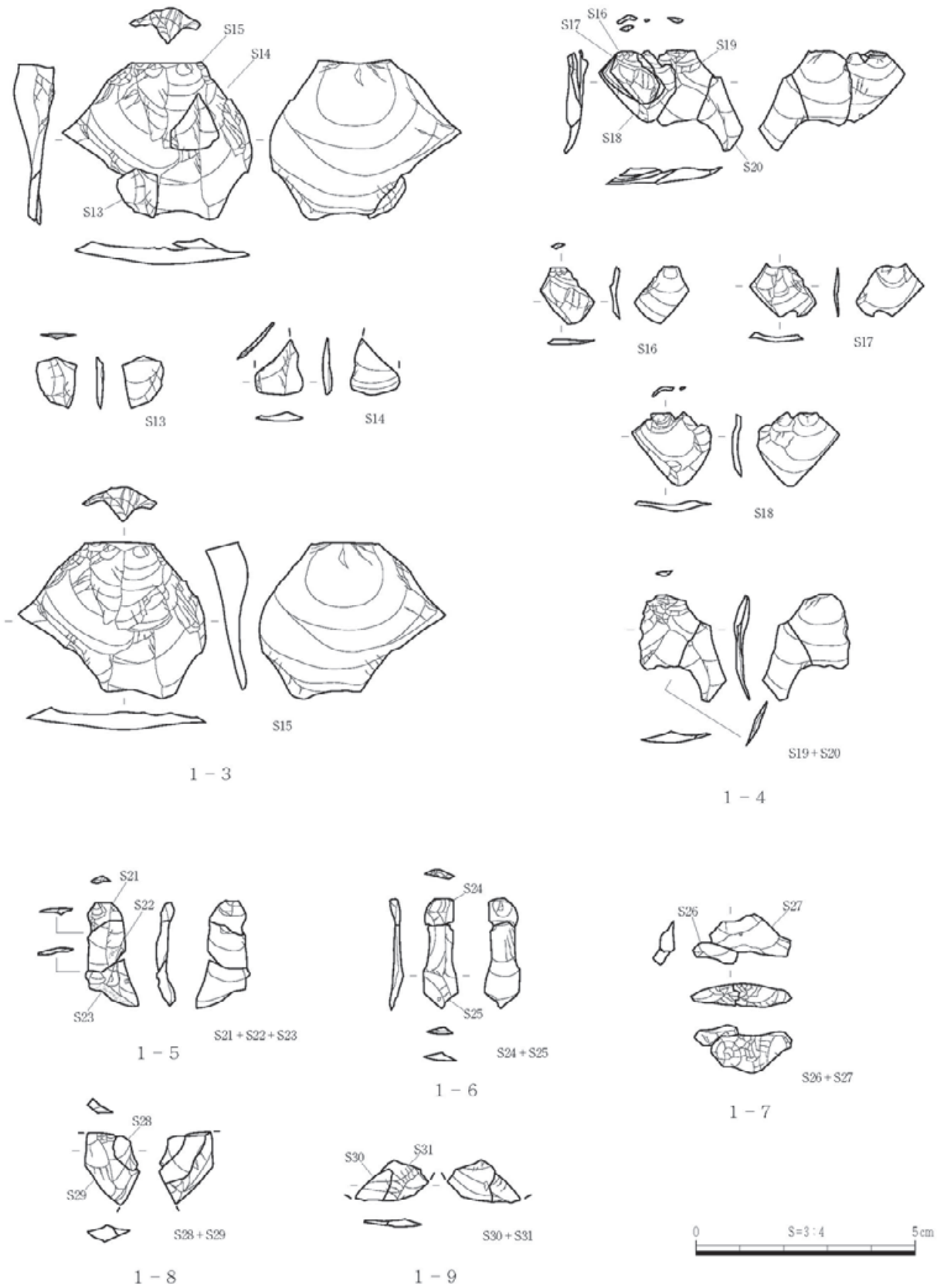
母岩1 (第79～81図、PL.56・57)

橙色を呈し珪質部分が縞状に入る良質な玉髓。144点中131点がこの母岩に属する。

個体1-1は、7点の接合資料である。原礫の表皮を除去した後に、打面を180度転移し、幅広の剥片(S4+S5)と細長い剥片(S3、S7)を、側縁を重ねて交互に取る。S7は小石刃に分類される。打面は調整打面で、剥片はすべて剥離時に折れている。S1とS6は剥片末端からの付随剥片。S2は碎片で、小石刃を意図した剥離が反転したものかもしれない。



第79図 母岩1 接合資料(1)



第80図 母岩1 接合資料(2)

個体1-2は5点の接合資料である。単方向から、やや幅広で不定形の剥片を連続剥離する。ブロック1で行われた剥離作業の主要な目的は、このような剥片の生産であったと考えられる。剥片はいずれも薄く、剥離時に折れている。

個体1-3は3点の接合資料。単方向から、幅広の剥片と小石刃を混在して取る。打面は調整打面。S13は末端の付随剥片。S14は小石刃の剥離が反転したもの。S15はブロック1と2との間の風倒木痕内から出土した。

個体1-4は5点の接合資料。単剥離面打面から、単方向で剥片を取る。いずれも小さく薄い。

個体1-5と1-6は小石刃が剥離時に折れたもの。1-7は石核の打面縁部が、打撃によって事後的に節理面から剥落したもの。1-8と1-9は、剥片が剥離時に潜在したヒビから分離したものである。

第81図には母岩1の非接合資料を図示する。S32~35は小石刃で、S32は右側縁裏面に微細剥離が連続して認められる。折れているがブロック1では唯一の微細剥離をもつ資料で、小石刃が目的なものである可能性を示す。S36~S48は剥片で、小さなものが多く、すべて剥離時に折れている。S49は打瘤裂痕からの付随剥片。

S50~S57は二次加工片。S50~S52は急角度調整の際に、縁部が折れたもの。二次加工を受けた素材が、石刃ではなく薄い剥片であることがわかる。個体1-2に含まれるような薄く不整形な剥片を素材に、ナイフ形石器を製作したものと考えられる。S53はナイフ形石器先端の、S54は基部の端部折片。S55~S57はプランティングチップ。S50などとは異なり、平均的なナイフ形石器を製作した時に生じたものである。

母岩1を構成する資料の出土状況を第82図と第83図に示す。接合資料(第82図)では、剥離時に折れたもののうち大きな破片や主要な部分が、ブロック北部の散漫分布域に存在する傾向が確認できる。非接合資料(第83図)でも、比較的大きめの剥片や小石刃(S33・S34・S35など)が、ブロック北部や周辺部の分布が散漫な箇所偏在する。この場所が一次選別の場であることを示唆するものである。中でも、唯一使用の痕跡を示す小石刃S32が北部にあるのが注目される。一次選別だけでなく、石器を使用した作業もいくらか行われた可能性を物語る。

母岩1の接合資料はいずれも部分的で、全体の状況は詳細にはわからない。比較的大きな剥片の中に、表面や末端に礫面が付着するものがあることから、剥片剥離作業は初期に近い段階にあったと思



写真6 ブロック1検出作業風景



写真7 ブロック2検出作業風景

われる。接合個体どうしに接点がないことから考えると、あまり小さくない石核の、異なる部分を剥がしているようである。石核はまだ相当の容量を残したまま遺跡外に搬出されているであろう。



第81図 母岩1 非接合資料